

序論 水軍領主論の軌跡、熊野水軍研究の焦点

はじめに

本書は、湊やその後背地に勢力基盤を構築することにより地域社会に影響力を及ぼし、そうした実力を背景に海上での軍事活動、広域にわたる経済活動を積極的に展開した水軍領主の姿を、平安・鎌倉時代から南北朝・室町・戦国時代にかけてのいくつかの局面に焦点を当てながら復元し、その領主支配の特質を考察しようとするものである。主な対象とするのは熊野地方、紀伊半島の水軍領主たちである。

第Ⅰ部では、まず熊野別当家との関係から熊野の海上勢力を見出し、その政治的動向を整理する。次に個々の水軍領主に即して、勢力基盤の特質、武士団としての構成などを多角的に追究することで、その全体像の復元に努める。彼らの活動範囲はその周辺海域に止まらず広域に及んでいた。第Ⅱ部では、熊野から東へ向かい伊勢を経て東海・関東・東北にまで及ぶ、信仰を通じた政治勢力間の結びつきについて、あるいは紀伊半島から西に向かって瀬戸内海の海上勢力と結んだ雑賀衆の海上における動向について分析し、水軍領主を媒介とする地域間の交流のあり方とその変遷を探究する。

収録するのはすべて既発表論文に加筆・訂正を加えた論稿であるため、ここでは、まず関係する研究史を省察し、近年の研究動向を整理することにより、本書の研究史的な位置づけを行う。

1 水軍領主論の系譜

ここで用いる「水軍領主」という概念について、研究史的に規定しておきたい。水上での戦いに特化した武力をもつ階層が、一揆的に横に連携するか、あるいは戦国大名のような上位の権力のもとに編成されれば「水軍」となる。ここでは条件により「水軍」の構成要素となりうる領主層を、「水軍領主」と規定する。戦時には「水軍」に転化する諸階層の、沿海地域や海上での平時における「領主」としての支配のあり方を見極める必要がある。

耕地を開き、それを中核に所領を形成して、さらに広く地域社会に影響力を及ぼす領主権力を「在地領主」と規定する。中世武士について、京武者やそれに従う一族に連なる系譜を重視する研究もあるが、必ずしも都から下向した武士が地方にそのまま定着したものと考えるべきではない。彼らを受け入れる条件が在地の有力層によって整えられ、両者が融合する中で都の武士の地方留住・土着が実現し、在地領主としての家が形成されてゆくものと理解すべきである。近年の研究では、本領の中核を構成する町場に屋敷を構え、そこを行き交う人々に対する関与を深め、交通・流通を管理し、自らも都鄙間の移動を繰り返す在地領主像が提示されている。

こうした在地領主についての規定を前提とすれば、一方では田畠を領有し陸上交通にかかわりながらも、一方では海上を通じた人や物の流れに関与し、むしろ後者を主要な基盤とする在地勢力こそが「水軍領主」ということになる。彼らは、水陸交通の結節点としての湊に即した屋敷や城郭を構築、それを拠点として海上にナワバリを形成し、さら

にナワバリを越えて広域に及ぶ海上交通に関与し、戦時にはこうした海や湊に即した拠点や海上での活動により蓄積した航海に関する技術を活用して、水軍としての軍事力を発揮する存在なのである。

榎原雅治は、陸上の街道で山賊が果たした兵士役と海賊(水軍領主)の警固役(上乘)とは、地域の領主として同質性をもつことを指摘している^①。海陸を問わず交通・流通に関与することは在地領主層の普遍的性格と考えられるが、そのうち特に領主としての勢力基盤において海上での活動に特徴がみられる階層を、ここでは「水軍領主」と呼ぶことになる。

また黒嶋敏は「海の武士団」概念について、実際には多様な階層が集団を作つて活動していることから、その使用を躊躇している^②。黒嶋の指摘は理解できるが、その中核に領主的な階層があつたことは間違いないと思われるので、本稿では「海の武士団」の中核となつた海上勢力として「水軍領主」概念を用いることにする。

研究史上、社会経済史的な意味をもたせて「水軍領主」という用語を意識的に用いたのは、一九八六年の戸田芳実「中世南海の水軍領主」が初めてであろう^③。この論文は、畿内の社会構造の特質解明を旨指した大阪歴史学会の取り組みの中での研究報告に基づき執筆された、一九七〇年の「御厨と在地領主」を前提としている^④。

「御厨と在地領主」の中で、戸田は、畿内や九州の事例を分析する。社会的分業の荘園制的編成の中、御厨のような非農業的な産業の場において、王朝貴族と在地領主はどのような癒着・結合関係をもつのかと課題を設定し、大江御厨山本河保両執当職となる水走氏のような、供御人の長、供御物の調達・管理・交易者、漁業・交通業・市場の管理者という、海や港にかかわる長者的な土豪としての性格をもつ在地領主が、非農業的経済と密着して公家政権を支えていたものと評価する。さらに摂津渡辺津を検非違使・惣官として検察した渡辺党、肥前宇野御厨の牛牧を管理した松浦党についても、同質の領主として分析した。